小学校部会　授業研究会の記録

記録者　宮崎市立赤江小学校　大脇　一洋

【授業者ふりかえり】

発言者	内　　容
加久藤小学校 松元教諭 真幸小学校 福松養護教諭	【3年　保健】 Ｔ１：松元教諭 ○　児童の実態（運動後の手洗い・うがい、ハンカチ所持等）を踏まえ、本単元の指導計画を作成した。 ○　Ｔ２（養護教諭）の専門的な指導により、「身の回りを清潔に保つこと」の意識付けが図れた。 ○　児童相互で意見交換を行わせたことで、自分の意見に自信がもてる、人の意見を共感的に聞けるなどの効果があった。 Ｔ２：福松養護教諭 ○　他校児童への指導だったので、児童の実態を把握することからスタートした。（給食交流、事前授業への参加等） ○　もっと実態把握ができていればよかった。 ○　開催地区小体連の研究内容との関連を考えながら指導計画を立てた。ブラックライトの活用については、もっと効果的な活用方法があったかもしれない。
飯野小学校 井上教諭	【6年　ボール運動】 ○　「できる」を意識して、ICT とKOETA カードを活用した。 ○　KOETA カードにある技能の要点に加え、子ども達の声をもとに授業を進めた。 ○　KOETA カードを十分に活用できなかった。 ○　ICT の活用については、技能の高い児童を十分に撮影できなかった。 ○　サーキットは毎時間使っている。笛、太鼓も日常的に活用している。

【質疑応答】

【保健】

Q．手を洗う活動を取り入れた意図を知りたい。

A．児童にとって身近なものであり、取り扱いやすいものであったから。また、実験がしやすく、目の前で結果を見ることができる面もよかった。

Q．保健と学活の違いをどのように捉えているか。

A．学活は身の回りを清潔に保つ習慣を身に付けさせるための指導であり、保健は専門的知識を身に付けさせるための指導であると捉えている。

Q．ワークシートの「Ａくん、Ｂさんへのアドバイス」を取り入れた意図と期待する児童の回答を知りたい。

A．教科書に載っていた内容であった。本時は「手洗い・うがい」と「歯磨き」に絞ってあった。「歯磨き」については、「毎食後に歯磨きをすること」、「夜の歯磨きはより大事であること」を回答として期待していた。

【ボール運動】

Q. 前時までの経過を教えてほしい。

A. 児童の実態を考慮して、まずは「ラリーを続けること」を意識させた。本来は、「相手がいないところにサービスを打つ」を目指したいが、今回は「距離」や「相手が取りやすい場所」を意識させた。

Q. 第2時の「まな板」と「ざる」はどのように活用したかを知りたい。

A.「まな板」は、アンダーハンドパスの練習で腕を伸ばすことができるように活用した。「ざる」は、ボールの落下点に入ることを意識させるために活用した。

Q. 今回の単元で、「できる」をどのように捉えていたのか。

A. 今回の授業（サービス）については、補助資料の「技能系統表」に記載してある内容を目指した。単元全体としては、かかわって「できる」ためにKOETAカード、わかって「できる」ためにICTを活用した。

【全体協議】（ボール運動の授業について）

学習資料の意図的・計画的な活用について
○ ICTの活用については、各チームにタブレットを渡し、ゴールとなる技能のすり合わせを行うとよかった。 ○ 児童に動画を視聴させる時は、見る視点を与えることが大切である。 ○ 動画は、チーム全体の動きを確認する場面でも使うことができる。 ○ KOETAカードを活用して、子ども達に考えさせる場面があるとよかった。 ○ たくさんある資料をどのように活用するかをしっかりと考えて使うようにしたい。 ○ 指導者が動画を撮ることに気を取られて、児童へのその場での指導が十分にできていなかった。何のためにICTを活用するのかを指導者が考えておかなければならない。
「できる」を意識した授業展開について
○ 「できる」は、「楽しむことができる」ということも大切である。ネット型の特性である「チームの連携による攻防」をもっと意識させると、生涯スポーツにもつながる。 ○ 児童相互の話合いの場を増やすことで、思考が深まり、「できる」につながるのではないか。 ○ サーキットをさせる時は、その動きが本時のどの動きにつながるのかを意識させるとよい。 ○ サービスができるようになることの必要感をもっと意識させるとよかった。 ○ ゲームは点数化したことにより、児童の意欲がより高まっていた。 ○ 技能のポイントをおさえた後、少し練習をしてからゲームに入るとよかった。また、１点ゾーン⇒２点ゾーン⇒３点ゾーンのように、段階的に練習させる方法もあった。 ○ 技能の高まりがみられた。しかし、攻防を楽しむために、細かすぎる技能指導は考えるべきである。 ○ 本時に目指した動きが上手にできた児童を最後に紹介するとよかった。
その他
○ 児童が授業の流れを理解しており、学び合う雰囲気もできていた。 ○ 準備運動は、運動量の確保ができていた。 ○ めあては児童から出させるようにしたい。 ○ 指導案に記載してある「児童の思いや願い」を大切にしながら授業を進めていきたい。

授業研究会　指導助言の記録

記録者　諸塚村立七ツ山小学校　山田雅彦

指導助言者	内　　容
南九州大学 人間発達学部 教授　宮内　孝	・　保健でも体育でも共通して言えることは、「学んだ事を他者に教えると、学習の定着率は９０％以上になる。」といこと。今日の保健学習では、友達に助言する活動は入っていた。つまり学習内容の定着率は 90％以上だと言えるのではないか。 ・　前回の学習指導要領からネット型が入った。ネット型には大きく「攻守一体型」と「連携プレー型」２つある。バレーボール型は「連携プレー型」になるので、「連携」=ゲームの面白さを味わわせることが大切。しかし、毎時間かわり映えのしないゲームばかりだと子どもは飽きてくる。かと言って、「ボール操作技能」だけの練習をずっとやり続けるのも飽きてくる。 　そこで、１時間の中にゲームとボール操作技能の学習を入れるようになってきた。ドリルゲームとタスクゲームの両方を入れるように変わってきたが、それでもなかなか難しいという現状がある。 　今後も、ゲームとボール操作技能どちらかに偏るのではなく、子ども達の実態に応じて、柔軟に検討・実践していく必要がある。その際、あまり難しく考えないことが大切である。 ・　今日のアンダーハンドサーブの動きは、「下から投げる」という動きがベースである。そこで、「とって投げる」という動きの練習の際に、下からどんどん投げる練習（ボーリングのような動き）を取り入れるとさらに良かった。 ・　教師側が「こちらのやり方が簡単だから」と思いこんで教えると、子どもにとっては実はそちらの方が難しい、ということもよくある。ボール運動では、特に児童の実態をみて指導していくことが大切である。

県教育庁 スポーツ振興課 指導主事　原田　誠	・　保健で学ぶ内容は子ども達は何となく分かっているので、面白くないのが実情である。だから「やりなさい！」ではただのしつけになってしまう。子ども達が「なるほど。そうなのか。もっと知りたいな。」と思うような、導入での内発的動機付けが大切になってくる。今回はブラックライトでの導入が大変効果的だった。またＴ・Ｔの活用も有効であった。T1 養護教諭ではなく、学担が行わなければならない、ということはもう一度全体で共通理解しておく必要がある。 　子ども達にとって、学んだ事をいかに活用していくかが大切である。自分で学んだことを整理して友達に伝える今回の学習は大変効果的で、アクティブラーニングの流れが非常に表れていた授業だった。 ・　「体育の授業で何を教えるのか」が大切である。「学び」はなくて、「活動」になってはいないか。そこで学習指導要領が大切になってくる。「この時期に何を教えないといけないのか」をしっかりと把握しておかなければならない。 　今回は技能の習得であった。「わかってできる」「かかわってできる」「できることを実感できる」「楽しんでできる」、そのような研究を今回はしていただいた。 　指導と評価の一体化は大切であり、評価は教師の指導改善のためにもきちんと行う必要がある。評価項目の中にある「態度」の指導は体育のみである。今日の評価は「態度」であった。評価内容のような態度をとることが、技能の向上につながる、ということを実感させることが今日の学習であった。技能の向上は、すぐに評価するのではなく、ある一定期間をおいて、ある程度の高まりを得てから評価をする必要がある。 　体育の指導内容（3観点）を身に付けさせるためには、どのような活動を行うべきなのか、という切り口はブレずに、授業を構成していくことが大切である。